心を潤し、心を清める「水」が持つもう一つの力

私たちは水がなければ命を維持できません。稲や野菜の栽培・家畜の飼育も不可能なら、炊事・洗濯・入浴など日々の暮らしにも大きな支障が出ます。人の営みに不可欠な水ですが、実はそんな「機能」の面だけでなく、文化的精神的な面でも私たちの暮らしに深くかかわっています。高月町立観音の里歴史民俗資料館学芸員佐々木悦也さんと、長浜市尊勝寺町・自治会長の西村巧一郎さんにお話をうかがいました。

平野神社の「御手洗替え」の一場面▶

水で「穢れ」を「祓う」日本の文化

私たちは生まれた直後にまず産湯で体を清め、大人になっても他民族に比べて頻繁に入浴する習慣を持っています。神社に参る際には水で手を清め口をすすぎ、毎日の生活でも門前を掃き清め打ち水をする習慣があります。そこには、汚れを流してほこりがたたないようにする以外に、はらい清める思いが込められているものと見られます。日本文化の中で、水は穢れを祓い清浄さを保つものとして欠かせない存在になっています。

「有名な奈良・東大寺二月堂の『お水取り』でも、遠く若狭の遠敷川より10日かけて水を送られ仏前に供える『お香水』にしているといいます。信者たちはこのお香水を競って受け取り、お札と一緒に飲んで万病を癒す御利益を得ようとしています」（佐々木悦也さん）

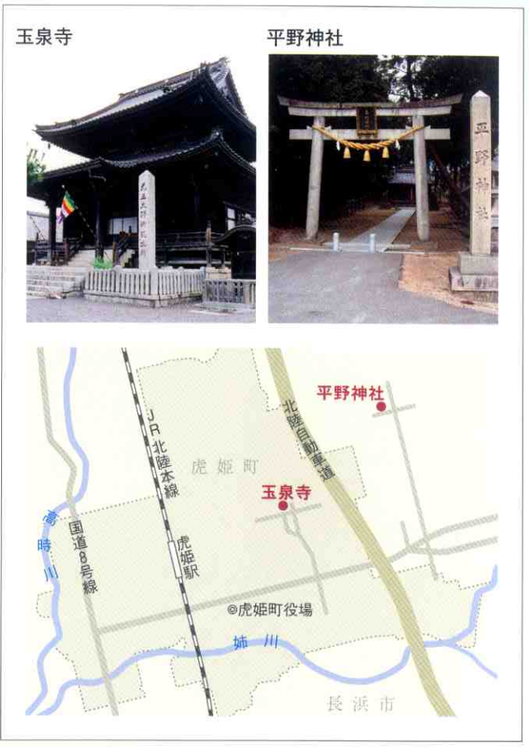
わが国では体の不調を病気＝気を病むと書き、「穢れ」は「気枯れ」とも表してきました。つまり穢れを祓えば、気が枯れた状態を脱して健康になるとの考え方です。

天台宗の玉泉寺では井戸替え盆（水替え盆）

虎姫町三川にある天台宗の名刹・玉泉寺でも、水が主役の「井戸替え盆」の行事が8月7日にあります。御宝前に供える「閼伽水」をくむ井戸が、ミタラシ堂内の「オヤイケ」、境内の「シモイケ」と2つあり、4年に1度オヤイケを、他の3年はシモイケの水を総入れ替えします。

村人から選ばれ、1週間精進潔斎した奉仕人が井戸から水をくみ出し、その水を桶に入れて村中を歩き回って出会った村人にかける行事です。不思議なことに、くみ出した水には必ず古いモミが混ざっていて、その数でその年の豊作・凶作を占うことでも知られています。

この行事は仏に供える水を清浄に保つのが目的であると同時に、その水によって村人たちを清め、日々の穢れを祓いたいとの思いの表れでもあるといえます。



平野神社にも「御手洗替え」神事が

同じく長浜市尊勝寺町の平野神社でも、毎年7月の夏祭り（麦祭り）の中に同じような「御手洗替え」の神事が伝わっています。

▲平野神社にある祠

この神社では、参拝者が手を清める水は自然の湧水。祠の中にある小さな池から水がわき出し、そこから流れ出た水で手を清めます。この池の水を年に1回すべてくみ出し、新たにわき出す水で池を満たすのがこの神事。かつては六尺ふんどし姿の独身男性6名が担当、やはりくみ出した水を手桶に入れて集落の中を練り歩いては村人にかける習わしでした。村ではこの日は働いてはいけない「野休みの日」とされており、外に出ている人には誰に水をかけてもよいとされました。

「よそから嫁いできたばかりで事情を知らない嫁に『雨が降ってきたぞ。洗濯物を取り入れろ』と声をかけて外へ誘い出し、水をかけられるようにしむけたこともありました」（西村巧一郎さん）

今では、地域の世話役がこの役を担い、水をかける代わりに「くみ上げた水を御神酒とともに集落の四隅にまいて地域を清める」形に変わっていますが、その心は同じ。やはり、水の持つ「穢れを祓う」力によって、村人たちの1年間の穢れを祓い健康でありたいとの願いからでしょう。

日本人は、生きていく上での嫌なことを「なかったことにして忘れる」知恵を持ち、それを表す言葉に「水に流す」という表現を当てています。いずれも、水が「嫌なこと＝汚れたもの」を洗い清めて、本来の姿に戻してくれるとの思いからだと見られます。水は物理的な汚れを落とすと同時に、私たち日本人の心の穢れも落とし、清めるものとして欠かせない存在なのではないでしょうか。

お話を伺った方

西村巧一郎さん
長浜市尊勝寺町
自治会長

佐々木悦也さん
高月町立観音の里
歴史民俗資料館
主幹（学芸員）

写真提供　長浜市尊勝寺町自治会
高月町立観音の里歴史民俗資料館

井戸替え盆の様子

1
左側にあるのがシモイケで、中央のミタラシ堂の中にオヤイケがあります。

2
水替えに携わる人（奉仕人）は、朝湯に入って身を清め、白い浄衣に晒しの帯の装束となります。

3
奉仕人は御宝前にて住職よりお加持を受け、御神酒がふるまわれます。

4
奉仕人は、足に荒縄を二重に縄結びし、手桶を持ってオヤイケに集まります。

5
晒しのホオカブリをし、オヤイケの水を頭から浴びます。

6
シモイケに二人が入り、手桶で水を汲みだし、桝の中にあけます。

7
他の奉仕人は、オヤイケの水を汲んだ手桶を持って村中を歩き回り、出会った人にその水をかけます。

8
境内においても参詣者や見物人にもその水をかけます。

9
汲みだした水の中に、毎年数粒の籾が砂に混じって見出されます。

10
その籾は新しいものでなく、焦げ痕のあるものや、かなり古そうなものが多いようです。

11
籾は本堂に運ばれ、その時刻が記帳されます。

シモイケとオヤイケの水を汲みだすことが繰り返し行われます。その後、近郷の僧侶により読経が行われ、世話方とのやりとりの後井戸替え盆は終了します。